

婦人と子ども



盲啞教育の起源

小西 信 八

此戰國多事の時に當りまして、私共フレーベル氏の紀念日に當つて、フレーベル會を靜かに催すことの出来るは御同慶と思ひます、二三日前の新聞に見ますと、敗戦の結果を聞かれて露西亞の皇后は禮拜所で泣かれましたと云ふことで、これが若しアペコベに東郷艦隊が全滅したと云ふならば、吾々はどういふ様に騒いで、皆さんと此に集つてフレーベル氏の爲めに會を催すといふことなどは出来ぬ

と云ふ事を思へば、實に手の舞ひ足の踏むを覚えぬと云ふ嬉しみがあゝと思ふ、此頃此に出てお話をせよと云ふことを承りまして、殊に幼稚園と云ふことは熱心に好んで居りました事でござりますから、喜んで御話を致す積りであつたが、奈何せんもう十四五年前の事で、トンと此方に来て見ても出来ず、他の幼稚園を見ることも出来ず、時々此方で拜見するだけで、此に來て幼稚園に因みのわる様な話は出来ぬから再三お断りをして見たのである、見たのでない本氣にお断りしたのである、けれども中々御使の方が御如才がござりませぬ、到頭引出さるゝ様になりまして甚だ男甲斐もないと思ひました、併し乍ら、これもフレーベルの爲めと思ふて負けて参りましたのであります、常ならば中々負けはせぬのである。併し昨晩までトンと忘れて仕舞ふたのはまことに申譯がござりませぬ、私は幼稚園の事は話されぬでも、セメて子供の事に就ては、私が幾らかこれまで従事して居ることで御参考になることを申上げたならば、矢張りフレーベル氏に對して申譯になることと思ひます、私の生徒が目の見えなくなつた原因と耳の聞えなくなつた原因を調べて居ります、其事を話さうかと思ひました所が丁度、婦人と子供の一號かに出て居ります、お顔を見れば四五年前の方々とは違つて居らうから話さうかと思つたが、併し雑誌に出たものを言ふことも良心に咎めて出来ぬで、急に話の題を改めて、これならば皆さんにお話をした覚えがござりませぬから、大奮發でお話が出来ると思ふて、フレーベル會に縁は近くはないが差支へないかと思ふて、お話をすることに致しました。それは盲人の教育と

聾人の教育の起つたことで、これから子供のお世話をなされる上に子供にお話を下されても、其次に又盲人聾人を可愛がつて下さる様にと思つて出ました。

昨年八月末の調によりやすと、幼稚園の数は師範學校に附屬が十一で、市町村に立つたが百七十三、私で立てゝ居るが七十九、都合二百六十三ある、大した事になつて居ります。保母の數も師範學校在職が十九、町村の幼稚園の保母の方が五百十八人、私立幼稚園に百八十九人、子供の數が師範學校附屬の數が八百三十六人、市町村の幼稚園の子供が一萬八千六十五人、私立幼稚園の子供の數が四千七百四十四人、都合子供の總計が二萬四千八百八十五人、これ程の昨年の三月の數であります。多いとは申しましたが小學校の數に比ぶればまことに少い、子供も少いでござりますから、これもモツト澤山に殖れば宜からうと思ひますが、併し、これとても唯々並みの人のばかりでありまして、耳の聞えぬ目の見えぬ、者の爲めには一つの幼稚園もないと申すは實に殘念と思ひます。これはどうか皆さんに御盡力を願つて、西洋の様に何處の盲人の學校にも、聾人の學校にも、此方の學校にも幼稚園の附屬の出来る様にして欲しいと思ひます。それには盲人を可愛がつて見やう、聾人を可愛がつて見やうと云ふ人が出来ねは出来ぬと思ふ、これは皆さんに願つて置いて宜い事と思ひます。

これからお約束したお話をしたいと思ひますが、佛蘭西には普佛戰爭で大敗北を致した爲めに、世界から忘れられたる如くに一時は信用を失つて、それまでは日本の軍隊なども佛蘭西の眞似をしてやつ

たが後には獨逸式に移るといふ風で、佛蘭西の方は殆んど忘れられたるかの如くに氣の毒に思つた事
 もあります、けれども、其實、中々學問と云ひ凡ての事が獨逸に劣らぬ進歩して居る。他の事は知りま
 せぬが、唯々人の話でござりますが、彼の盲人の教育と、啞人の教育とは今日佛蘭西が元祖の國として
 尊敬せられて居るのであります、併し乍ら今から五百年程前はまだ野蠻人と云つて笑ふ程の資格は具
 へて居なかつたかの様に思はれます、それは千八百二十五年で、(日本では龜山上皇の崩御の翌年)チャ
 ールス七世の御代、四人の盲人に甲冑を着けさせまして棍棒を以て大なる柵を結び廻はして、其内に
 大なる家を放して之を打殺した者に家を取らせると云つて、途法もない、其盲人は家を欲しいかドウ
 か知らぬが、家を打たせてお互に打合つたりするを見て、朝野の人は少しも氣の毒と思はぬで居つた
 と云ふ、如何にも人道に外づれた所爲でないかと思ふ。下つて千七百八十三年、これは日本と對照す
 れば紀元二千四百四十三年、天明三年塙保己一先生が辛苦して拵へた群書類從の出來上つた翌年で、
 淺間山の噴火した年であります、さういふ近い年であつて今から二百年ばかり、巴里の町の大通りの
 或る居酒屋の主人が、十人の盲人を長い卓子に並べて音楽の書物を読んで居るかの如くに眞似とさせ
 て、音譜の本などを見てゐるかの如くに並べてある、さうして側の附いた眼鏡を掛けて種々の樂器を持
 つて、打つたり、叩いたり、叩いたりして、其調子の揃はずして可笑い音をさせるに由つて客を引い
 て居る、さうすると往來の人が不思議な音をさせて騒いで居るから、何かと思ふて覗いて見ると種々

飾つてある、そこで知らず／＼足が踏み込んで、一盃々々又一盃で遂に奥に乗じて財布の空になることも知らぬで、盲人さんの調子外づれの音楽を聞いて居つたと、さうして主人は想はぬ儲けをして客の財布が空になり、主人の財布は満つると云ふことがあつた、然し斯ういふ人情に外れた事を何時までも看逃すものでない、たま／＼其處を通りかけた者がある、其名はワランタン、アユイと云ふ人で、如何にも人情に外づれた惡むべき仕業であると嘆息しまして、ドウかして此盲人の爲めに救つてやる工夫をしたいものである、世の中の人に玩ばるゝと云ふことのない様にしてやりたいものであると考へました。さう思つて居る矢先きに、或日會堂に出掛けると、其會堂の門内にルンと云ふ盲人がゐ下んなさへと云つて出した其手を押へて、毎日斯うして幾ら貰へば宜いのであると云ふと、幾ら／＼と云ふ、それでは、それだけを毎日お前に遣るから、私の言ふ事を聞て私の處に來いと云ふことで連れて歸りました、其ルン是天稟優れたものと見えて、何を教へても能くする、これが抑も盲人を教ふると云ふ事の初めである。其前に勿論、ルン九世がイヂプト遠征に行つて、熱砂に依つて目を潰した者を養ふ爲めに、三百人の盲人を養ふて盲人の養育院が出来たといふこともある。併しそれは食べさせるだけで、教育するのではない、盲人を教育することは、全くルンが始めである、其處で種々教ふることを工夫しましたが、誰でも此盲人に教へやうと云つて、手を着ける時には先づ／＼ドウして教へるかと思ふ。此第一の問題であると思ふ。此ワランタン、アユイもドウしたならば讀み書きが

教へらるゝかと考へた末、木を組んで教ふると云ふことをやつたものと見える、ところが、或日此所
 ンがアユイの机にあるものを取つて来いと言はれて搜して居ると、彼方では、人の來た時に持つて
 來た名札を籠の中に入れて置く、それをイデリて見たらしい、所が此印刷の強い爲めに、名刺の後ろ
 の方に字が高く出て居る〇の字を見て、これは〇の字でないかと云ひました。そこでアユイは非常に
 喜んで我事成れりと言つたと云ふことである、ドウして教ふれば宜いか、ドウして教ふれば宜いかと
 思ふて居つたものであるから、一寸した事が考への本になる、それから突字が出來たのである、これ
 からして盲人に教ふことが大變に樂になつたと云ふことである。

突字は今の様な偶然の出來事からして工夫が出來たのであります、左様にして面白く續いて居ります
 と、千七百九十一年に、革命の爲めに慈善會中の者が、或は牢屋に投げらるゝ者もあり、或は追放され
 る者もあり、首を刎ねらるゝ者もあり、大騒ぎになつた、學校は國庫から支辨して貰ふことになつた
 けれども、間もなく亂民の爲めに、さういふ事をするものが出來ずして、名ばかり政府支辨の學校で
 あれども、政府から金を貰ふことは出來ずして、僅かの自分の持つて居る財産を悉く出して、それが
 盡きた時は、生徒と一緒に印刷所に行つて、印刷に従事して一緒に錢を取つて二十六人の子供に食べ
 させたり着せたりした、中には一日一度しか食べないで、目の見えぬ者が飢渴を感じぬ様にした、所
 が千八百一年、此學校に大打撃が落ちて來た、それは先刻申しました三百人の盲人の養育院と、此學

校が合併せねばならぬと云ふ政府の命令である、イチフト遠征の爲めに出来た養育院、其中には随分非道い、譯の分らぬ者がある、其中へ以ていつて將來に望みある盲人の者を一緒にして置くはアユイの堪ふことの出来ない苦であつた、今まで規律正しく教育した者を一緒にして教ふると云ふことは出来ずして、悪いことばかり聞いたり、真似たりするからそれを見るに恐びないでとう／＼校長の職を辭して自分で學校を開きました。これは三年程の間續いて居つたが、維持が出来切れないでした。其中露西亞の皇帝から招かれて、途中伯林の皇帝から款待を受けて露西亞に居ること十三年、それに參つて失望したは、皇帝は盲人を教育しやうと云ふ難有い思召であつたか、どうも政府の人々が盲人を集めることをしない。ドウいふものと尋ねると露西亞には盲人は無いと云ふ、大變失望させて仕舞ふた、それで千八百六年露西亞皇帝の所に參つてから、十三年程居つたが、段々年も取つて故郷に歸りたいと云ふ念が切實であつて、露西亞皇帝に暇を貰ふて、其時に皇帝が訣るゝに恐びぬで、何度も抱き締めて、高い勳章を賜はつたりしました、朝廷の御役人からは冷かなる冷遇に逢ひました、歸りますと直ぐに家にも寄らぬで（自分の家はないが兄の家があつた）直ぐに學校に行つた、然るに其時の校長は、如何にも了簡の狭い校長であつたと見えて、其學校の創業者の大恩人が十三年も留守にして歸つたと云ふに、ヤレ來たと云つて歓迎するかと思ひの他、ボルボン朝廷に對して反逆をした人であるから、入れてはならぬと云つて突き返へしました、決して反逆の仲間に入つたのでないけ

れども、さういふ事を言つて、自分の學校の創業者を追ひ出して仕舞ふた、それを職員生徒が聞いて沸騰して其校長は遂に辭職せねばならぬ様になつたといふ事です。其次に校長になつたはフケクニと云ふ人でありました、これは此アユイの盲人の爲めに骨を折つたことで、其成功の著しいことを認めて年取つて何時此人の身に不幸が来るかも知れぬと云つて、懷舊會とでも云ふ様な、此人の徳を懷ふての大音楽會を催しました、さうして朝野の人を招き、舊の卒業生の唱歌をやりました、盲人の父と云ふ題で以て、此人が學校を建る時の此艱難辛苦を入れてさうして成功した事を歌ふたのである處がそれを歌ふとアユイはどうか夫は止めて呉れ、さう私を賞めて呉れるな、私の功でない、神のしたのであると言つて其唱歌を止めさせたと云ふことである、自分の功を誇らぬで神に歸したと云ふ、それは千八百二十一年、それ程に喜びましたが、聞くに堪へないで止めさせた程感極つた、それから翌年の三月に遂に亡くなりました。

此人の精神と云ふものは、歐米各國に、更に遠く東洋の日本までも傳はつて、今の讀み書きが出来る様になりましたことは直接には他に骨を折つた人もあらうが、遠く言へば此佛蘭西のアユイの功といはねばならぬ、然し只今此方の學校はアユイの字でない、夫は高い字であるから書くことが出来れば讀むことが出来ぬ、讀むことが出来れば書くことが出来ぬといふ不便があるのです。ところがアユイの後で、矢張り佛蘭西の盲人でルイ、ブレユと云ふ盲人がある、此人はアユイの學校を卒業して、ド

ウかして盲人に自分の手で書いたり、讀んだりする様にしてやりたいといふ考で、自分が其學校で教へを受けた経験から、斯うしたならば宜いとか、アーしたならば、宜いとか種々工夫を凝らしましたが、或時歩兵大佐のボツ／＼字を突いたものを見て、これは宜いこれ程宜いものはないと考へた。然しそれは数が多くて十二ある、それではいかぬと云ふので六點にした、日本のは盲啞學校の石川倉次といふ人が三年程苦んで面目を改めました、殆んど發明したと言つても宜い程である、モツと此人の事に就てお話をすればあるが主意でござりませぬからそれ程にして置きます。

又啞人の方、の教育は、ドレーターといふ人に始まりまして、これも佛蘭西が元祖であります、此ドレーターといふ人は千七百十二年に生れて八十九年に亡くなつた人であります、此人はドウして啞人を教育することになつたか、これは佛蘭西のベルサイユと云ふ所の貴族の人でありまして、僧侶になる教育を受けた、或時朋友の所に行つて女兄弟子供が針仕事をして居る或時話をしかけたが返辭をせぬ、どうした事と思ふて友人に話すと、先頃まで何の何某と云ふ者が世話をして教へて呉れたが一週間前に病氣で亡くなつた後斯うして始終來て居るけれども、吾々は何と教へて宜いか判らぬで誠に氣の毒に堪へぬで居るといふ。それを聞いてドレーターは、さういふ不幸な人を教ふるは神の意に適ふのであると言つて、そこで其者を預つて、これまで聾啞を教ふる経験はなかつたが、熱心に工夫してやつて見ると中々成績が著しいので、それを聞き及んで、所々方々から生徒を連れて頼みに來て、

遂に六十何人となつて、自分の家に入れ切れないで、特別に家を借りて教ふると云ふことになつた、併し乍ら此人は一も政府からも保護を仰かず、他人からも金を出して貰ふたのでありませぬ、皆自分の財産、其財産は祖父さん、親翁さんから引請けた財産が年々七千磅先づ七千圓、其内千圓自分の爲めの用に取つて、後と六千圓啞人の爲めに使つて、唯で食へさせ、唯で教へる、それ故に非常の儉約をせねばならなかつたのです、然し此に又ドレーターと云ふ人の貴ぶべき性質は、富貴の人が頼んで來れば預るけれども、元來富貴の人は己れ一人で教師を雇ふても出來る、故に富貴の人を教ふるが主意でない、我は親達が授業料を拂ふて教ふることの出來ぬ子供を取るものである、といつて居りました。富貴の人の子供の來るは拒みもせぬが喜びもせぬ、これが貴い、兎角、吾々でも、能く出來る子供は前に置いて、手がかゝつて一番教師が面倒を見ねばならぬのは棄て、置く様になる、穢い着物を着て居る者は餘計世話をせねばならぬが手が出ぬ、ドレーターはさうでない、金の無い所の子供は餘計に世話をせねばならぬ、といふ。世の中には種々の人もありますが、此人ばかりは少しも利己主義のなかつた人でありませぬ。或年大變これまでに云ふ時、ブル／＼震へて、白の落るも構はぬで教へて居高齡で、日本ならば七十七の祝をするに云ふ時に、ブル／＼震へて、白の落るも構はぬで教へて居つた、すると六十何人が泣き出して、貴方が私等の爲めに勘辨して、火も焚さずに居らるゝ、貴方が居られねば私共はドウしませう、モウ少し身体を大切にしてお下さればならぬ、と云つて泣いて言つ

たと云ふので其爲めにストーブを焚いたと云ふことである、それ程までに啞の子供を可愛がつたのであります。併し乍らドレーターと云ふ人の教へ方は手眞似が主意である、太陽とか、水とか、何でも手眞似である、初めは發音を教へたのでありますでしたが、成績が好くないと云ふので手眞似で教へた、此は佛蘭西で最も行はれたので又佛蘭西法とも云ひます、其處でドレーターの成績が四方に聞えて、露西亞の皇后さんや、奧西太りの皇后さんから澤山お金を遣るから自分の國に來て教へて呉れと言はれたが皆斷つて、私の仕事に御目が留つたならば金を下さるよりも貴方の國の啞を教ふる教師を御寄越しなさい、さうすれば知つて居るだけを教へる、其方がお爲めになる、私の様な何時墓に入るか知れぬものにお金も要らぬ、又餘所の國に行つて功を立てやうと云ふ望みもない、私の仕事がお認めがござりますならば教師を寄越しなさいと言つた、それから澳太利から二人よこされた、故に此國では佛蘭西の如く手眞似が行はれて居る、諸君が御覽になれば手眞似は如何にも見苦しい、千八百八十年に伊太利のミランと云ふ所に歐羅巴大陸の盲啞教師が寄りまして、佛蘭西法と獨逸法と何れか宜しかか、といふことの會議がありました、其時、佛蘭西の手眞似の法が否決されて獨逸の發音法でなければならぬと云ふことに決しました、それには種々事情がある、伊太利であるから伊太利の人か多かつたとか、又佛蘭西法の代表者の説明が不充分であつたとか云ふ事などの爲でしよう。けれども發音法でなければならぬと云ふので、今まで手眞似でやつて居つた教師には止めさせて、元祖の佛蘭西ま

で發音に返つて仕舞ふた、獨逸法はサミウル、ハイテツケと云ふ人、此人が發音で教へねば充分なことは出来ぬと云ふことを云ひました、それがサクソンの王様に聘せられて、今は獨逸に百に近い陸の教育法は皆發音法である、英吉利でも亞米利加でも段々發音を主張して、今新しく立つる學校は發音々々で、古い學校も發音を加へたと云つて廣告をする様になつて居る、然し手眞似の法は形の上では廢せられて居るけれども、雙陸ばかり寄つた時は手眞似でやる方が都合が宜いから、先生の居られぬ時は手眞似で話す、私が彼方に行つた時に、向うは獨逸、此方は佛蘭西で手眞似を使つて、少しも不便はなかつた、故に手眞似といふことは決して馬鹿に出来ない、之を急に禁するは殘酷な様に思ふ。けれども吾々は發音を輕蔑するにあらず、けれども手眞似がならぬと云ふは吾々に日本語を使ふとはならぬと云ふと同じ感情を有たしむるであらうと思ふのです。斯ういふ譯でドレーターの手眞似法は、ハイテツケの發音法に勝を譲りましたが、然し其廉潔と云ふ點に於ては一番高い地位を占める、ハイテツケは少し利己主義の人で、尊貴の子供を取り月謝を澤山取つて非難を受けたといふ様なんです、ドレーターの德行は他の人の企て及ぶことの出来ない所であつたと思ひます、若し教育社會に於きましても先刻から申しましたドレーターとかアユイと云ふ様人ばかりならば、一昨年あたり起つた教育社會の騒ぎなどはなかつたらうと思はれますに、殘念な事であります。どうかして此ドレーター、アユイの様な考へばかり持ちたいものと思ひます、皆さん少しい時から、さういふ高潔の心を持つ

様に子供を教育することを皆さんに希望致しても、無理ではあるまいと思ひます。

四十八

其處でこれは聾人を教育する事のみでありますが、私の學校には芝から通ふもあり、或は淺草から通ふもある、これは子供に罪はないが、盲人按摩と云つて、杖を取つて投げたりする、盲人の人に對して眞に氣の毒である、この様なことは幼稚園の子供の時から、盲人は親切にせねばならぬ、手を引きてやらねばならぬとか、氣の毒に思ふて親切に世話をせねばならぬものと云ふことを充分御世話を願ひたいと思ふ、兎角子供は跛の人とか身體の具はらぬ人を見るとじつと見て居る、それは宜くない、まだ黙つて見て居るは宜ひがアラ〜と言つたりする、子供であれば仕方がないが、教育の足らぬ證據と云ふ非難は免かれぬ、穢い着物を着て居る人を見てじつと見て居ることのない様に、不具者を見てもじつと見て居る様なことのない様にせねばならぬと思ふ、今の盲啞學校の築地にあつた時、文部次官の奥様が大きな菓子袋を持つて來られて、それから分けてやつて、實にこれは盲人の前で言ふ事でないと思ふたことは、赤いのは女の子に遣れと言はれた、それは常に私が生徒に對する上からして、生徒はマサカに不公平にして私が女の子に最負して旨いものを遣ると云ふことは思はぬであつたが、夫でも其時に盲人の顔が非常に變つた、其菓子は梅の花の菓子で紅と白であつた、形も味も同じである、唯、赤いのを女の子の方に遣れと言つた時に、これは言ひ損つたと思つた、さういふ細い所までは實際盲啞にたづさはらねば判らぬが、盲啞は可愛がつてやらねばならぬ、親切にせねばならぬと云

ふこと又は易い事と思ふ、此際獨立の盲啞學校を建てるなど云ふことは野暴であるから請求せぬが、セ
 メて出来る所では小學校の引けた後なりに、小學校の先生が其近所の盲人を教へてやると云ふことが
 工夫が附けば、何の様に盲人の爲めになるか、啞人の爲めになるかと思ひます、これは私の發明では
 ありません、亞米利加には澤山あります、英吉利の倫敦には啞兒の學校が十八ある、盲人の學校は十
 ほどある、盲人でもなく、啞兒でもなく併し乍ら並みの者でない早く言へば馬鹿であるが、馬鹿でも
 ないが惻口として取れぬ、其類の者の學校が三十一ある、盲人、聾、啞と云つて馬鹿にすることがな
 いかと云ふて聞くと決してない、氣の毒だ、親切にしてやらねばならぬと云つて、手を引いたり物
 を落せば拾ふてやるとか云ふ様に、同情心を養ふに餘程宜いと云ふことである、近くは日本にも長野
 市の小學校に啞人と盲人とを教ふる所がある、福島にも一つあります、仙臺の師範學校にもあります、
 手紙を遣つて聞くと倫敦と同じで、彼處へ遣れば擲られやうとか輕蔑せらるゝとか云ふことはない、
 これは吾々の豫想よりも好いと云ふことである、殊に東京市などには盲人の學校も啞人の學校もあり
 ませぬ、大阪京都にはありますが、此東京市に一つ位はなければならぬと思ふが、文部省の學校に一
 任して居る、東京市の盲啞の生徒は八十何人居る、けれども財政の都合もあつて、俄に出来ぬとして
 も、有志の人が我が公務の後で世話をして見やうと云ふ人があれば、何處の管理者でも世話をすると
 思ふ、

もう一つ終りに申したいことは、これは少し話の質が違ふが、盲人を可愛がつて貰ひたいと云ふことの例として申します。スウィツランドの博物學者にヒューバと云ふ人があるこれは一千七百五十年に生れた人で、丁年の前に夜學に依つて遂に眼を失つた、其前に代官の娘のセチバと云ふ愛敬すべき娘に可愛がられて、卒業の後には結婚しやうと云ふことの約束をして、兩親の許しも得て居りました。ところが眼の見えなくなつたと云ふことを聞て代官か、娘に前の約束を取消せと云はれた時に、娘が言ふに、大學に居て人を持て離されて才物だの學者だの言はれた時に手を執つて約束して置いて、今や眼が見えなくなつて尙更我が手と我が助けの要る時に當つて、忽ち前約を取り消すといふことは私としては出来ぬ、義理としても人情としても出来ぬ、此事ばかりは仰つしやる通りに出事ぬと云つて、お父さんの言ふことを聞かなかつた、お父さんの言はるゝことを聞かぬことを子供に教ふることを望むのではありませぬか、其貞操と、深い同情とを歎美するのであります。これは日本に例がある親御の方から約束を破毀せよと云ふことは在方に行くと澤山あります、到頭セチバが二十五歳になつて婚禮の出来る年になつて、親の許しはなかつたが婚禮をして其後親も許すことになつた、ヒューバは博物熱心であつたが、眼の見えぬ様になつてから愈々深く研究して、一人の僕に斯うせよあーせよと云つて研究した、取分け蜜蜂の動作習慣を調べて、これまで當り前の學者の知らぬ所を發見した、見る力が非常に要る、そしてこれまでに眼の見える人が數千年來發見し能はざる所を發見した、僕も働いた

が此夫人の助けも中々大なる事であつた、古人の中に有名な人もあり、大した人もありますが、此夫婦ほど、生涯安樂に暮らした人はないと云ふ程であります、これは、セネバの話であるが、日本にもこれと同じ話があります、これは此方々の中にも御存じの人があるかも知れぬから、間違へば直して戴きたい、福島縣の何炭鑛持主の何某と云ふ人、それは炭鑛に骨を折つた人であるが其人が目が見えなくなつて、姉さんを以て、家内を里へ連れて來て貰ふて、私は眼が見えなくなつたのだから、此婦人は眼の見えぬ者に添はすは可愛さうであるから、離縁して貰ひたいと云ふことを連れて行つてから話した、すると、怪しからぬことである、眼のある中に私が何か氣に召さぬ事があつて離縁と云ふことならば何とも仕方がないで御請するであらうが、眼が見えなくなつて、それに連れ添ふて居ては氣の毒と云ふことでは承知ならぬと云つて連れ歸つて、今日は何十萬と云ふ身代でそれを皆整理して、其主人が目が見えぬ様になつてから、これは粗いこれは細いと云ふことを鑑別すると云ふ、此盲人の優れた人と云ふことは確かであるさうであるが、此婦人も大した婦人であると云つて其土地の人は褒めて居るといふ話、これは實業の日本と云ふ雜誌で讀んだのであります。これは日本にさういふ貴婦人があると云ふことは西洋の本で讀んだよりも感じが違ひます、我國にもさういふ人がある、又これは私の方の學校に關係のある人で、それが或る所に轉勤せられて、或時學校に來られて生徒の作つたものを買ふに、啞生作とない方が人に上げるに宜いでないかと云ふことであつて、私は喫驚した、難

有^あい事^{こと}であるが、然^{しか}し啞^あ生^{せい}の啞^あの字^じがあるが爲^ために、請^うけが惡^{わる}いと云^いふ様^{よう}ではやつて下^{くだ}さるなと云^いつて御^ご斷^{だん}はりをした事^{こと}がありました、それからモウ一^{いっ}は年^{ねん}始^しに啞^あ生^{せい}の作^{つく}つた新^{しん}聞^{ぶん}挾^{けつ}とか云^いふものを配^ばつた、さうすると年^{ねん}始^し早^{さく}々^く穢^{けがら}らしいと云^いつた人^{ひと}がありました。今日^{こんにち}では、盲^{もう}啞^あの様^{よう}な者^{もの}を恐^{おそ}ろしいものと云^いふ感^{かん}じはなからうが穢^{けがら}らしいものと云^いふ人^{ひと}がまだあります。どうか啞^あ人^{じん}も矢^や張^{はり}人^{にん}間^{けん}であつて、穢^{けがら}らしい者^{もの}でも恐^{おそ}ろしい者^{もの}でもない、寧^{むしろ}ろ可^か愛^{あい}ものであると云^いふことを小^{ちひ}い時^{とき}から御^ご吹^ふ込^こみ下^{くだ}さる様^{よう}に願^{ねが}ひたいと思^{おも}ひます、

(了)

